
魔法先生ネギま！－最終幻想の魔法使い－

真っ白い布

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま――最終幻想の魔法使い――

【Nコード】

N8294T

【作者名】

真っ白い布

【あらすじ】

注意！ これは感化されやすい作者が書いた駄文です。

転生、主人公最強の最低モノの要素が入っているだけでなく、処女作、国語力0などの要素も入り作者の妄想のはけ口となっております。

それでも構わないという人のみ読んで下さい。

タイトル変えました

序話（前書き）

今更ながら序話投稿です。
指が進まない……。

序話

あるところに一人の青年がいた。

その青年の容姿は黒髪黒目、平凡と地味という二文字がよく似合う容姿だ。

「何かすつげー目立たないって言われてるような気がする……」

……地味に勘はいいようだ。地味なくせに。

「何だろ。めちゃくちゃ腹立つ。」

この手の話題に関しては鋭くなるようだ。地味なくせに。

そんな青年は今、学校の帰りで、夕暮れの道を独りで（誤字にあらず）歩いている。

地味属性に加え、ボツチ属性もあるようだ。

可哀想に。（嘲笑）

「見下された視線のようなものを感じる……」

しかし、青年には、地味属性、ボツチ属性に加え、もう一つ悲しい属性があった。

それは、

ブオオオオ……ドンッー！

「へ？ちよ、うごわっ！？」

居眠り運転をしたオートバイに引かれると言う。
何ともレアな死に方をするという不運属性だ。

「……………俺の人生こんなばっか…………グフッ」（バタリ

○○○○○○○○

「死んだと思ったら何故かDFFの聖域に居たんだ。
不思議なこともあるもんだね！」

と、この様に先刻引かれてしまったジミー君は何故かDFFの聖域にいて絶賛パニック中だった。

……………足が無いのは御愛嬌だ。

「あっはっはっはっは！（ドゴッ！）ん？」

脳の許容量をかなりオーバーしてぶっ壊れていたミスタージミーは何かを殴るような音に気がついた。

「な、何の音だ？」

と、ザ・ジミーは軽くビビり入った調子でその音の方に向かって

みると、そこには！

「貴様はっ！人のっ！気持ちをっ！考えたことあのかぁ！」

ドゴッ！バキッ！ゴシヤッ！メリッ！

「がぶっ！ごふっ！べふっ！ぶふっ！」

右フック、左フック、アッパーカット、掌打という流れるようなコンボをキレイ系な美女が、銀髪のイケメンに叩き込んでいた。

「……うん、意味分からん」

展開が速すぎてついていけないようだ。

（単に作者の力不足です。すいません。by作者）

「カス作者め……」

（何でこれだけ聞こえんの！？by作者）

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラオラア！」

！……！！！」

ドガガガガガガガガガガガガガッ！！！！！！！！

「ほつといったらミンチになりそうだしとりあえずあの私刑を止めに行こう……怖いけど」

（数分後）

「い、いやあ助かったよ。止めてくれてありがとね！」

とさつきまでシバかれていたイケメン銀髪は言う。
もつとも殴られすぎて顔がかなり歪んでいるが。

「は、はあそうですか」

「いや、でもホントに危なかった」ねえ、ロミリオ」

ビクウ！

「はっ、はいジュリエル様！なんで御座いますようか！？」

「さつきと話しておいたほうが良いんじゃないの？」

ジュリエルと呼ばれた金髪の女性が、ロミリオと呼んださつきまで話していた銀髪に言うと、

「あー、そうだったね……じゃあ、本題に入ろっか」

その言葉を聞いてジミ男は表情を引き締め、姿勢を整える。

「まあ話すと長くなるから簡潔に言うよ？」

「へ？あ、はい」

そして、銀髪はこう言った。

「僕と契約して魔法使いになって世界を救ってよ（キラッ）」

「……………は？」

「僕と契約して魔法使いになって世界を救ってよ（キラッ）」

「いや、ワケが分からないよ！」

「だーからあ、僕と契約して魔法使いになって世界を（ドバキヤッ！！）がぶふっ！！」

三回目は金髪さんにシバかれて言えなかった。

「あのゴミにも劣る物体のことは忘れてくれて構わないわ。後は私が説明するから」

声が平淡すぎる。

「は、はい！（めっちゃこええ！）」（ガクガクブルブル

）金髪さん説明中）

「えーと、要約すると

・俺は天命で死んだ。

・あの銀髪さんは不本意であるが神。

・金髪さんも神。

・あの銀髪さんは間違つて悪意の欠片とか言つのを世界とかいうところにぶち込んでしまった。

・そこでちょうどよく俺が死んだ。

・神は世界に原則的には介入しちゃだめだから俺にやらせちゃおう！と勝手に銀髪さんが決めた。

・その事を金髪さんが聞いて銀髪さんをミンチにしようとした。

・その途中で俺乱入！

……こんな所ですか？」

「うん、まあ大丈夫ね、もっと言うとないつは貴方の了解無しで無理やり送ろうとしたわ」

「うわあ、止めなきゃよかった」

あの銀髪（以下ゴミ）はヒドいクズだったらしい。

「ヒッ！ヒドいッ（バギヤ！）おぶっ！」

「黙れ、喋るな、口を開くな、皮を剥ぐぞ」

「何故！？」

「あのー、それで俺はどうなるのでしょうか？」

地味之助はゴミに対して完全なる無視を決め込んだようだ。

「つーか、さっきから地味地味言われてるような気がしてならない件について」

「どうしたの？」

「いえ、何でもありません」

「そう、じゃあ貴方の処遇についてね、今貴方には2つ選択肢があるわ」

「一つはこのまま輪廻転生の輪に入って転生する。この時は記憶も無くすわ。」

「そして二つ目は悪意の欠片を壊すために転生する。この場合は記憶もあるし、特典も付くけど悪意の欠片に戦ってもらっわ」

「もし、戦わなかったら？」

「その時は世界から生き物がなくなると思ってくれて良いわ」

「他の人は勝てないんですか？」

「勝てる人も居るけどかなり限られてくるわよ」

「まあ、こっちでもサポート位ならできるからさ！ちょっと転生してきゅ（メリコッ！）ぶぷっ！」

「自己保身しか頭がないゴミは黙ってて、というか死ね」

金髪さんの蹴りがゴミにクリティカルヒットした！

「全く汚らわしい。バイオ兵器よりたちが悪いわ」

「へへっ、何かに目覚めそうだよ……」

「……………キモッ」

金髪さんは本気で気持ち悪い物を見てしまったと言つような顔をしている。

「はあはあ……」

「それで、どうするか決まった？」

金髪さんも無視を決め込んだようだ。

「はあはあ、放置プレイ……」

「うーん……、よし、後者でお願いします」

「……本当に良いの？半端な覚悟だとすぐに死ぬわよ？」

「それでも、いいんです。確かに苦しいかもしれませんが誰かがやらなきゃいけないんですよ？」

「それはそうだけど、はっきり言っちゃえばよほどひどい人じゃない限り誰だって良いのよ？」

「うーん、まあ普通に考えたら嫌ですけどね、

こんな約60億分の1の転生のチャンスを逃すほど奥手じゃありませんし」

そう黒髪の青年（性格が少し地味じゃなかったので評価が上がった）が言うと、金髪さんは溜め息を吐き、

「分かったわよ。全くそんな堂々と言いきられたらどうしようもないじゃない」

「ホントですか!?!」

「ホントよ。それで?3つまでだけど特典をあげるわ。

因みに行く世界はネギま!で、時間軸は大戦期よ」

「ネギまですかぁー」

「あ、因みにどんな特典かによって悪意の欠片の形とかも変わるから」

黒髪の青年は少し考えた後

「んー………………よし!決めた!」

「を!決めたの?どんな能力?どんな特典?蒼の魔道書?マスタ
ーユニットアマテラス?斬神?」

「何で全部ブレイブルー関係なのよ」

「ファイナルファンタジーの魔法全部と、魔力ほぼ無限で！後は、身体能力を上げて下さい」

「なあ、ファイナルファンタジーよりブレイブルーに（ドゴツ）ぎやっ！」

金髪さんのハイキック！

きゅうしょ（後頭部）にあたった！

「自分の希望を押しつけるなゴミが」

「……………」

ゴミは気絶していた。ざまあ

「あのー、チート過ぎたでしょうか……………」

「ん？ああ、全然大丈夫よ。私的にはこのゴミをどう苦しませて殺るかというアイデアが欲しい所ね、何かない？」

「ゴミのことなんて0.1秒も考えたくありません」

「それもそうね」

この二人は結構相性が良いようだ。

「さて、特典も聞いたことだしそろそろ転生させましょうか」

金髪さんがそう言い黒髪の青年に光を纏わせた

「特典の付加は転生している時にするわ。一応修行できる場所に送っておくから」

「何から何まですみません」

「このくらい大丈夫よ」

……そろそろね。では、良い生を！」

そして黒髪の青年は光に包まれその場から消えた。

序話（後書き）

魔法の説明っていりますかね？

一話目（前書き）

文が気持ち悪い等があります。
そして、初っ端から超展開です、
注意なさって下さい。

6月25日改変しました

一話目

ある、荒野に轟音が響く。

そして、その荒野にいたのは。

ヒト、ヒト、ヒト。

まるで野原にある草のような、

川を流れる濁流のような、

大量のヒトがいた。

そして、そのヒトの大群は互いに争い合っていた。

剣で斬られる者。

銃で撃ち抜かれる者。

魔法で焼かれる者。

様々なヒト達が様々な殺され方で殺されていた。

そして、そのヒト達が挙げる、断末魔、悲鳴、呪詛、呻き声に反応するかのように蠢く、黒く、暗いナニカが在った。

そのナニカは負の感情が籠もった叫び声が、呻きが、吐かれると同時に、

少しずつ、しかし、確実に大きくなり、
大きくなると同時にヒトの形を形作ってゆく。
しかし、争い合っているヒト達は気付かない。

そのような正体不明かつ、見ているだけで歪だと感じられるようなモノなのにも関わらずだ。

しかし、それは仕方のないことも言える。

何故ならそれは、この世界に現れたイレギュラーであり、ヒトの悪意そのものだからだ。

そして、その悪意は形作られ、

美しい銀色の髪、ローブのようだが、腹部や、太ももが露出した服、そして、

中性的な顔立ちだが、サディスティックな光を宿した瞳をした、青年となった。

その、青年の名は、クジャ。

かつてある世界で大国の女王をそそのかし、ガイアと呼ばれる世界に戦乱をもたらした者だ。

そして、彼が形作られた時には、

ヒトの形となった悪意は一人のヒトとなり、他のヒトにも気付かれるようになる。

「誰だ！！貴様！！」

問われたクジャの口角は上がりサディスティックな笑みを浮かべる

「誰だっていいじゃないか。どうせ君たち……………」

「こいで死ぬんだしねえ！」

ここで一つ補足をしておこう、悪意が真似たのは何も形だけではない。身体能力、魔力、魔法の知識等の

破壊活動に不必要なモノを全て制限して、真似たのだ。

つまり、

「さようなら」

一フレア一

ゴウッ！！

有象無象では、足止めは愚か、ただの的にしかならないということだ。

「グアアアアアアア！！！！！」

「いいね、もっと君たちの悲鳴を聴かせておくれよ！」

ー連弾ホーリーボールー

ズドオン！！ズドオン！！ズドオン！！

光球を大量に降らされ、今まで争い合っていたヒト達は為す術もなく逃げ惑う。

「あっはははははははははは……！」

必死になって逃げ惑え！！もっともつと生に縋ろうとする姿を見せておくれよ！！」

ズドオン！！ズドオン！！

○○○○○○○○

所は変わり、惨状となっている戦場より少し離れた場所で、
歳は10歳位であろうか、一人の少年がその戦場を厳しい目で見ていた。

「遂に来たか……」

その少年はまるでその惨状が起こる事を識っていたような口振りで言う。

「はあ、3年しか修行出来なかったぜ」

その少年は心底面倒そうな口調で言う。

「でもまあ、来ちまったもんはしょうがないか」

「さて、デビュー戦だな。
いっちょ、勝ってくるか!」

そう言い終えた少年は、文字通り、飛んで行った。

○○○○○○○

「はあ、全く期待外れだよ。
もう少し粘ってくれるかと思ったのに」

「だったらよ、俺と戦^やろっぜ!」

「ん?」

ズドン!!

クジャの上空から声が聞こえた瞬間にクジャから少し離れた場所に少年が着地した。

「よつとと、着地成功と」

その少年を見た瞬間クジャの目は少し見開かれ、そして、ゆっくり

りと口角が上がってゆく。

「へえ……………」

君、小さいけど強そうだね。」

「そりゃあどうも」

「君は楽しめそうだね。

名乗ってあげるよ。僕の名前はクジャだ」

それを聞いた少年の口角も上がり、声高らかに言う。

「良いね、そういうの、嫌いじゃない

俺の名前は八咲悠介。

お前を倒す転生者の名だ!!」

そして、クジャと少年……いや、悠介の魔法がぶつかった。

設定紹介

八咲悠介

性別 男

年齢 10歳（現在）

黒髪黒目

平凡を体現したような顔立ち

・能力

A T K : B

M A G : A

D E F : A

L U K : B

S P E : B +

M P : 「*」

「*」ネギま！の魔力は雀の涙程しかないが、
F F 魔力だとE Xとなる。

・アビリティ

・身体能力U P : S

神から貰った能力。

身体能力を上げる。

・幻想の力 : E X

神から貰った能力。

FFに出てくる魔法を全て使えるようになる。

・幻想の魔力：EX

神から貰った能力。

FFの魔力を膨大に使えるようになる。 しかし、ネギま！の魔力はほぼ無くなる。

・サバイバル：B+

サバイバル技術が身に付く。

説明

元はただの高校二年生だったが、

天命の交通事故によって死亡。

二回目の生を記憶を引き継いで生きる代わりに、

神が間違えて落とした「悪意の欠片」を破壊する命を負った。

そしてその時にチートを貰った。

転生直後は7歳だったが、3年修行して大戦期へと移行した。

【マジックインファイター】

拳と魔法で至近距離、遠距離の闘いに対応する。

二話目（前書き）

こんにちは。

真っ白い布です。

戦闘描写は難しいですね……。

時間すごい掛かっちゃいました。

キャラ崩壊あるかもしれません。

駄文ですがこの作品を楽しんでいただけたらと思います。

二話目

ある荒野に爆音が鳴り響く。

そして、その荒野にいるのは。

銀髪で中性的な顔立ちをした青年、クジャと

黒髪黒目、平凡を体現したような少年、八咲悠介（以下悠介）だ。

その二人はまるでハチ鳥のように空を駆けている。

ー連弾ホーリーボールー

クジャが周りを舞っている光の玉を悠介の方へ射出すると、

「危なねえな！！オイ！！」

ー連弾ファイラーー

それと同じ数の炎弾を出し、相殺する。そして、

「凍てつけ！！」

ー連弾ブリザダーー

悠介が、十の氷弾を飛ばすが、

「甘いよ」

ー連弾フレアー

十の炎弾で相殺される。

一進一退、攻守がめまぐるしく変わる攻防が荒野で繰り広げられていた。

「つたく、埒が開かねえなあ！」

そう、悠介はごちる。

しかし、そう言いながらも、風を超える速度でクジャに近づき、

「フツ！！」

右ストレートを放つ。が、

クジャはそれを危なげもなく避ける。そして、

「そうれ、あげるよ」

ーバーストエナジー

「ツ！！」

フレアによる爆発が悠介を直撃し、5 m程吹っ飛ばされ

「綺麗だろう？」

四方八方から質量のあるホーリーボールが迫り、

ドガガガガガッ！！

「ガハッ！」

悠介はなぶられる！！

そして、今度は20m程吹き飛ばされる。

「ガッ！グッ…ハッ…。」

そしてクジャが追撃と言わんばかりに、

ー連弾フレアー

フレアを放つ。が、

悠介はそれを黙って食らうわけもなく、

「そんな何回も食らうかよ！」

ー連弾ブリザラー

氷弾を飛ばし相殺し、

「お返した！」

ー連続サンダー

大量の雷を落とす！！

バチィ！！バチィ！！バチィ！！バチィ！！

「ククッ、君、なかなかやるね」

その言葉に一瞬驚いた悠介だが、

「ははっ、お褒めに与り恐悦至極」

すぐさまおどけて返す。しかし、

悠介を褒めたように見えたクジャだが、でも、と付け加える

「その余裕そんな顔が気に入らないよ！

見ていなよ、すぐに絶望に歪ませてあげるからさあ！！」

そう言い放ち、小さな光の球を悠介に向かって飛ばす。

ーホーリースターー

その光の球は悠介の目の前で急激に膨張し、

「ッ！！」

8の時を描くようにホーリーがその光の球の内側と外側に流れ、

ドオン！

爆発した。

しかし悠介はその爆発を紙一重で避けていた。

なので、悠介は爆風で体制が整っていない。故に、

「消えて無くなれ……！！」

アルテマの雨が悠介に降り注ぐ！

「があああああ！！！」

「ははははっ！さあファイナーだ！」

クジャがそう高らかに宣言した瞬間

今まで降っていた球の3倍はある球が降り、

ズドン！

悠介に直撃した！

「ぐがああああ！！」 その衝撃で悠介は50m程吹き飛ばされる。

「あっはっはっはっは！無様だねえ！」

クジャの嘲笑が響く

「クツクツ、まあ、結構楽しめたね」

「楽しませてくれたお礼に僕が直々に君の生に終止符^{ヒリオド}を打ってあげるよ！」

クジャは声高らかに、そして、まるで演劇をしているかのように手を広げて言う。

「さあ、これでおしまいだ。愉しかったよ」

そしてクジャが手に魔力を集め、魔法を放とうとするが、

「ハハッ、残念だったな。クジャ」

「何？」

クジャは悠介の言葉に疑問を覚える。

しかし、その疑問は直ぐに解消された。何故なら、

「墜ちろ、星よ」

ズオン！

悠介がそう唱えた瞬間に空が裂け、

巨大な隕石が落ちてきたのだから。

ーメテオー

「なっ！いつの間に！」

実は悠介はシエルを唱え終わった瞬間から、メテオを発動させる準備を痛みに耐えながらしていたのだ

故に、あの短い詠唱のみで魔法の中では最上位に入るメテオを発動できたのだ。

「じゃあな。クジャ」

「グッ、クソオオオオオオオオ！……！」

ズッ、ドオオオオオオオオ！……！！！！！！

○○○○○○○○

ドサッ！

何かが落ちた音が聞こえた。

「ぐっはっ、ちょっと無理しすぎたらしいな」

その音の正体は悠介だった。

その小さな体には満身創痍という言葉がぴったりな程に似合い、ケアルガをかけていても、まだ危険な状態だった。

「ちっ、正直舐めてたな」

その声には少し後悔の念が感じられた。

「まさかあんなに強いとは思わなかったぜ」

そう言いながら、悠介のまぶたはゆっくり下がっていく。

「ああ、やべえ何か眠くなっ……てき……た……」

その言葉を言い終えた瞬間に悠介は眠りに落ちた。

二話目（後書き）

どうでしたでしょうか？

無理やりな所もありましたが、

お楽しみ頂けたでしょうか？

次回はあの人達が出てきます。

それでは。

三話目（前書き）

こんにちは。

真っ白い布です。

例の如く短く、駄文であります。

それでもよいと言つなければいけません。

三話目

ある荒野に人影が映る。

その影は小さな集団で、荒野を風のような速さで飛んでいた。

「まったく、何が起こったんだよ……」

その影の集団の先頭を飛んでいる赤髪の少年がそう言う。

「確かに先刻の光景は異常でしたね」

赤髪の少年が言った言葉に応えるようにローブをまとった青年が言う。

「大方、誰かが魔法でも唱えたんだろっ」

と、刀を持った男が言う。それに対して、白髪の少年が応える。

「しかし、隕石を降らせる魔法なぞ、見たことも聞いたこともないぞ」

その言葉にその集団の者達が驚く。

「お師匠でも知らねえのか!？」

「確かに、魔力のうねりも感じられませんでしたし」

「では、あれはいったい何なのだ？」

そして白髪の少年がもう一つの疑問を口にする。

「隕石が降っていた時には既に両軍の影も見えなかったのも気になるのぉ」

各々が思ったことを言いながら荒野の空を飛んでゆく。

「確かにお師匠が言ったことも気になるな。
よし、そんじゃああの隕石が降った所に行ってみようぜ！」

赤髪の少年がそう言い、その集団は速度を上げ、空を飛んでいった。

○○○○○○○○

集団が隕石が落ちた場所に着いた。

そこには、一人の少年が荒野に倒れ伏していた。

「！！オイ！大丈夫か！？お前！」

と、赤髪の少年が問うが返事がない。

「これは……危険な状態ですね、とりあえず近くの町に行きましようか。それにこの少年から話を聞きたいですし」

「そうじゃのう、よし、ナギ！その子を持って行けるか？」

ナギと呼ばれた赤髪の少年が応える。

「当たり前だお師匠！」

白髪の少年はその応えに満足したように頷き、その集団はもと来た道を風を越える速さで飛んでいった。

○○○○○○○○

side 八咲悠介

「……ん……ん？」

何処だこ……。

ああ、そう言えばこういう状況の時にはこう言えって友達（前世の）が言ってたな……。知らない天井だ……」

「起きてすぐネタを言える位なら大丈夫ですね」

なっ！！

「誰だ！！」

そう言い俺は起き上がろうとするが、

ズキィ！！

「~~~~~~~~！！！！！！！！」

「ああダメですよ、まだ完治していないんですから」

と言い、ローブを被った青年がまた俺を寝かせる。

コイツ、心底愉しそうに笑ってやがる……。

性格悪いな、とりあえず色々と気を付けておこう。

とか考えている内にローブを被った青年思い出したように

「ああ、そうでした、私の名前はアルビレオ・イマと申します。

貴方の名前、教えてくれませんかね？」

！！っーことは俺は紅き翼に捕まったのか。

「ハ咲悠介だ。一つ聞くが、あんたはあの紅き翼か？」

「ほう、私達も有名になりましたね。

そうですね、私は紅き翼の一員です。他の人達は今ちよっと出かけてましてね、私は貴方のお守りを任されたのです」

お守りつて……、いやまあ今は年齢的には小三だけどなあ……
何か複雑……。

「ふーん、で、それだけじゃないんだろ？」

「ほう、察しがいいですね……。」

「当たり前だ。気も魔力もない子供が戦場に居るって事自体おかしい話だからな

そんで？何を聞きたいんだ？

俺があそこに居た理由か？それとも、

あの……隕石か？」

「！……やはり何か、知っているのですね？」

やっぱり警戒心は高まったな。

さて、温めておいた嘘を話そうk「帰ったぞー！！」

全員集合か、後被せんな。

「おお！！起きたのか！！」

「まあ、おかげさまでな」

「なんだ、可愛げがねえなあ」

「いや、お主が言える事では無かろう」

「いやゼクト、あんたもだぞ」

「やれやれ、賑やかになりましたね」

えーと、確かあの赤髪がナギ・スプリングフィールドで、黒髪メ
ガネが近衛詠春、

んであの白髪がゼクトか、あんまり覚えてないなあ。

「ちょうど良かったですね。この子が話す所でしたし」

その言葉を聞いた瞬間全員の顔が引き締まる。

「んー、どこから話そうかな……」

○○○○○○○○

「あー、つまりお前は、戦争孤児で、そのままじゃ生きていけな
いから各地を放浪して、偶然見つけた遺跡にあった魔導書にその魔
法が書いてあって、なんだか導かれるように行った戦場と同じ様な
魔法を使う奴が居て、そいつをぶっ飛ばしたは良いが全身満身創痍
になってあそこに倒れてたって事か？」

「まあそんな感じだな」

ファイアを浮かべながら言う。

「なんだか曖昧な所が多くないか？」

「じゃが、ある程度は筋が通っているぞ」

当たり前だ、この三年間ずっと考えてきた嘘だ。
通ってなきゃ困る。

「んー、と言うことはあの隕石出したのはお前って事だよな？」

「ああ、そうだが？」

「じゃあさ、お前俺達の所に来ないか？」

「」「」「は？」「」「」

全身が何言ってんだコイツ？みたいな顔になる。

「いや、だってさお前親が戦争で死んだんだろ？」

「だったらさ、そんな力を持つてるならこんな戦争早く終わらし
ちまおうぜ！！」

ふむ、完全に騙されたな。（黒笑）

だけど、それは良いかもしれない。コイツらと行ったら沢山の戦
場を渡り歩くだろう。

そうしたら悪意の欠片と出逢う可能性も上がる。

しかも原作にも見た感じかなりの悪意があつたからな。

今の俺でさえこんなにボロボロになってるのにネギ勢が戦ったら
絶対死ぬ。

だったらここで原作に関われる布石を打っておくのが良いか、

「よし、その申し出受けよう!」

「ホントか!？」

「男に一言は……………無しさ」

「いや、間が長かったのですが本当に良いのですか？」

「何回言わせんだ、大丈夫だよ」

「それならば、自己紹介しておこうかの、ワシの名はフィリウス・ゼクトじゃ。宜しくの」

「はあ、ナギの行動には毎度の事だが頭が痛む……………、私の名は近衛詠春だ宜しくたのむ」

「では、改めて私の名前はアルビレオ・イマです宜しく願います」

「俺の名前はナギ・スプリングフィールド、千の呪文の男だ!」サウザント・マスター

「じゃあ、俺もだな、俺の名は八咲悠介、俺の職業は魔法使いだ」ジョブ

こうして俺は紅き翼に入った。

三話目（後書き）

どうでしたでしょうか？

感想を送ると真っ白い布は狂喜乱舞します。

批評も受け付けております。

四話目（前書き）

どうも、こんにちは。

真っ白い布です。

この前P V 2 5 0 0、ユニーク800突破致しました。
正直かなり驚きました。

このような駄文ですが。

どうぞ、これからも宜しくお願いします！

四話目

ある自然地帯に喧騒が響く。

そこでは紅き翼のメンバー達が鍋料理をしていた。

side 八咲悠介

何か、どつかでキングクリムゾン！！って聞こえたな……幻聴か？

まあそれは置いて、今、俺達は鍋を作っている。

鍋か……久しぶりだな。

前世と併せてもほとんどしなかったからなあ。
懐かしい……。

47

「これが旧世界の日本の鍋料理ってやつかあ。じゃ、早速肉を」

「あつ、ナギおまつ……何肉を先に入れてるんだよ！」

「トカゲ肉でも旨いのかのう？」

何でトカゲ肉？チャレンジャーだな、ゼクト
そっついや、トカゲと言えば

「真つ黒な龍の肉は美味かったなあ」

「それって、黒毛魔龍じゃないですかね？」

何、その神戸辺りの卸売り市場で売ってそうなのは。

とか言ってる間にナギが鍋に肉を放り込んでいく。

「バツ、バカ火の通る時間差というものがあってだな」

「うつせーぞえーしゅん」

「フフ、詠春知ってますよ日本ではあなたのような者を……【鍋將軍】と呼び習わすそうですね」

何でコイツ奉行の上の奴知ってた？あんまり使わない筈なんだが……？

（グーグル先生に聞いたら有りましたby作者）

何だ、また幻聴か？疲れてんのかな？

と、考えてる間にナギとゼクトが驚いていた。

「ナベシヨーグン！？」

「つ……強そうじゃな」

間違っではないんだが…何でそんなに驚くし？

「わかったよ……詠春俺の負けだ今日からおまえが鍋將軍だ」

「全て任す。すきにするが良い」

「良かったな、鍋將軍だつてよ、これなら鍋奉行なんて目じゃな

いな！」

「あるのか？鍋將軍って？」

あるらしいよ。他にも阿克代官とかも。

「おおなんじゃこのソース旨いぞ？」

「ホントだうめえっ！？」

「これこそが日本の誇るしょうゆだよ」

ああ懐かしいなあ……。こんな旨いしょうゆは久しぶりだなあ……。

「何で悠介は泣いているのですか？」

「さあ？知らね」

ああマジで旨いなあ。これにふがあつたら文句なしなんだが。

「それにしても本当に旨いな」

「ああ、姫子ちゃんにも食わしてやりたいくらいの旨さだな」

「姫子？誰だよ？」

「オスティアの姫御子のことじゃ」

「へー」

「まあ…戦が終われば、彼女を自由にする機会も掴めるやも……です」

何だっけ？監禁みたいなのをされてるんだっけ？

「その戦だな……………やはりどうにも不自然に思えてならん」

「何が？」

「何もかもだよ。お前が言い出したんだろっが、鳥頭」

確かに言われてみればおかしいな。

状況が悪くなったら激戦区に向かわされるのに、状況が良くなると辺境に飛ばされる。

まるで戦争を長引かせて「おいナギ、肉ばっか食べるなよ」

何だと！？

「いいじゃんか、食べたいんだから」

駄々っ子かお前は。ってそうじゃなくて。

ヒューン

「おいナギ、俺にも残し「ドガン」とけ……………よ……………」

……………あ、ありのまま起こった事を話すぜ！？鍋から肉を取ろうとしたら剣が落ちてきて箸が空を切ったばかりでなくその影響で飛んだ鍋は詠春の頭に行っただ！何を言ってるのかわかん

ね（ry

てか俺の肉があー！！

「食事中失礼~~~~ッ！

俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！！
いっちょやろうぜッ！！」

「なんじゃ？あのバカは」

「帝国のつて訳じゃなさそーだな」

今の俺にはそんなの聞こえない！！今一番大切なのは。

「おい！ナギ、ゼクト！俺にも下さいお願いします」

ナギとゼクトは肉だけだが取っていたので懇願することだ！
アル？あいつにそんな事したら何言われるか解らんわ！！

「だが断る」

育ち盛りなのに！！

「おい、大丈夫かえいしゅ…むお！？」

「フ…フフ…。」

詠春は鍋を被りながら笑っている。

「てか肉が取れなくなったのってアイツのせいだよな！？

ヒヤッハー！！アイツぶち殺す！！略してぶちコロ！！」

某とんがり頭の校長の口癖がでた。

「食べ物を粗末にする者は……」

「どーしたー来ねーのかぁー来ねーならこっちからいく」ザン
ッ！！」

詠春はラカンの剣を真つ二つにする

「おほ」

「斬る」

「ヒヤッハー！！俺も混ぜろ！！ぶちコロぶちコロ！！」

俺はそう言いながら近づき、戦闘が始まった。

「キャラが変わってますよ、悠介」

知るか！！

side 第三者

ジャック・ラカン（以下ラカン）は青山詠春（以下詠春）の剣戟を避けながら言う。

「ちよっタンマタンマ！あんたマジでつええな。ちよい待たね？」

「ふざけるなっ！！やる気なら本気を出せ貴様っ！」

更に詠春の剣戟の威力が増す。

その応えにラカンが口元を上げて言う。

「へっそーすか。けど5対1だし本気出す訳にもいかんのよね。あんた達の情報はリサーチ済みだぜっ!？」

そう言い、4つのカプセルを詠春に投げる。

そのカプセルの中から全裸の美女が沢山現れる（口リも完備）。

「情報その1生真面目剣士はお色気に弱い」

「くっ……卑劣な。いやなんのこれしき心頭滅却すれば火もまた
「ドガンー!!」ぐおう!？」

「結局惑わされてんじゃねえか!!寝てろてめえは!!」

そう言い悠介は詠春を吹き飛ばした。

鬼畜とはこう言うことなのである。

「情報その5地味ガキ、またの名を【正体不明】イマジジン」

【目立たず、騒がしく】『スーパージミー』

【流星の使い手】 シューティングスター

特徴：地味、弱点が無い。

「地味地味言うなああああ……！！！！！！！！」

後、二つ名も言うなあ！」

地味な事に関しては結構自覚しているようだ。

二つ名については【正体不明】『イマジン』は気も魔力も使わずに攻撃を繰り返すので正体不明の力を使っていると言ったことから付けられた。

【目立たず、騒がしく】『スーパージミー』はほぼそのままの
で割愛させて頂く。

そして、【流星の使い手】『シューティングスター』は基本的にメテオレインを詠唱しながら戦うのでついた名だ。

「このクソ筋肉達磨……絶対許さん……ぶちコロぶちコロ……」

ー連弾ファイガー

ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！ドン！

数多の炎弾がラカンを襲う！！

「うお！！気合い防御！！」

しかし、悠介の猛攻は終わらず、

「畳み掛ける！！」

— コラプス —

悠介の前に魔法陣が広がり、

「消し炭になれ！！」

極太のレーザーが射出される！

ギョオオオオオオン!!!!!!!!!!!!!!

「ちよつ!!ギャアアアアアアアアア!!!!!!!!!!」

ズドオオオオオオオン!!!!!!!!!!!!!!

「ヒャッハッハッハッハッハッ……ふう、スカッとした」

と、言い悠介は馬鹿でかいクレーターを作ったにもかかわらず涼しい顔をして……いや、少しやり過ぎたと後悔している顔をして帰っていった。

その後、ラカンが起き、ナギと10時間戦った末に仲間になった。

その後、悠介は頭痛が酷くなっていた詠春の愚痴を聞いていたという。

「こんな事子供にやらすなよ……」

四話目（後書き）

どうでしたでしょうか？

良ければ感想を貰えたら駄作者が喜びます。

五話目（前書き）

30分間に合わなかった……！

こんにちは今日も、駄文ですが宜しくお願いします。

五話目

ある大橋に怒号が挙がる。

そこには、人間と亜人が対立しあう二つの軍隊と、その内の人間の方の軍隊にいる紅き翼の面々が戦っていた。

○○○○○○○○

エアロガ

ゴオオオオオオオ！！！！！

大きな竜巻が発生し、兵をなぎはらう。

連発ホーリー

ヒュオオオオン……………

バシユン！！バシユン！！バシユン！！バシユン！！

天から光が落ち、宙に浮く戦艦を貫き落としてゆく。

「はあ、やっぱり人を殺すなんて慣れないもんだね。慣れたいないけど」

この惨状を作り出している悠介は言う。

「そら、凍てつけ」

連弾ブリザラ

ヒュンヒュンヒュンヒュンヒュン……………

氷弾を多数発射して周りを凍らせる。

「それにしても今日は何か嫌な予感がする（ズドオオオオオオオン
！！）……………フラグでしたか」

戦場のド真ん中に白い十字状のエネルギーが発生し、
敵であるヘラス帝国、味方であるメガロメセンブリア連合の兵達
を消し飛ばした。

「この攻撃……………、うえ、あいつかよ……………」

悠介は心底嫌そうな顔をする。
しかし、瞬時に表情を引き締める。

「じゃあねえな……………、叩き潰しに行くか！！」

そして、悠介は飛んでいった。

○○○○○○○○

白の甲冑を着込んだヒトが嘲笑う。

「ファッファッファッファッ。これこそまさに無力だな」

その言葉に怒ったのか、二、三人の兵士が突っ込んでくるが、

「無駄だ」

目の前に赤い紋章を発動させ兵士の攻撃を防ぎ、

「手も足も出まい！」

ハリケーン

自分を囲むように竜巻を発生させ他の兵士も巻き込み吹き飛ばす！

「ふん、無様だな」

そう言い、残った死体を一瞥し、歩き出すが、

連弾ファイラ

ズドドドドドドドド.....

「む！」

ターンガード

突如飛んできた炎弾に驚きながらも赤い紋章を出して防ぐ、しか
し、

「本命はこっちだよ!!」

後ろに回り込んでいた悠介が

纏い・ブリザラ

氷を纏った拳で吹き飛ばす!

「ぬぐう!?!」

「そら!これくらえ!」

ウオタラ

ザアアアアアアア!!!!

魔法によって発動した水が押し流す!

「ぬうん!!」

しかし、それは途中で防がれ水は霧散した。

「おいおい、ラ系魔法吹き飛ばすってどういつだった」

「ファッファッファッ。この程度か?小僧」

「小僧って言うな。」

俺には八咲悠介って言う名前があるんだよ」

「ファッファッファッ。」

「ファッファッファッ。」

じゃねえよこの野郎、てか腹立つなその笑い方」

あまり真剣さが感じられない掛け合いだ。

「はあ、まあいいやそれより、」

メテオレイン

ギユウウウウウ……

「むっ！！はあっ！！」

オールガード

ドオン！！ドオン！！ドオン！！ドオン！！

天から星が大量に降り注ぎ、煙が立ち込める。

ウインド

そして悠介が風をおこし、見えたものは

「ファッファッファッ。驚いたぞ。小僧……いや、悠介か。」

興味が沸いた、名乗らせてもらっぞ、私の名はエクステスだ」

そこには、傷一つないエクステスの姿があった。

「……反則じゃね？それ」

悠介は冷や汗を書きながら言う。

「ファッファッファッ。

そんな事より良いのか？ぼうつとしていて」

「は？ッ！！やべっ！！」

バチバチバチバチ……

サザンクロス

「ぐう！！」

シエル

ドオオオオオオン！！！！！！！！！！

その光景を見てエクステスは感心したように頷く。

「ふむ、とっさの判断としては上出来といえようか」

連弾ファイラ

ズドドドドドドドドド……

「温い」

ターンガード

エクスデスは赤い紋章で易々と防ぐ。そして

しんくうは

バシyunバシyunバシyun!!!!

エクスデスは三連続で真空の衝撃波を放つが、

連弾ブリザガ

氷弾で相殺される。

その間に悠介は空に飛び、態勢を整える。

「さてさて、どう攻めようかね……」

表情では余裕そうな顔をしているが、悠介は内心かなり焦っていた。

しかしそれも仕方のない事だろう。何故なら自分の攻撃は全く効かず、その後のカウンターがかなりの確率で当たってくるのだからならば、取れるべき行動は唯一つ

「相討ち覚悟、耐久勝負の真っ向勝負ってどこか……」

チッと舌打ちをする。

「（面倒くせえ、だけどやんなきなあ……）」

「（はあ、痛いのは嫌なんだがなあ……、しゃーねえ……行くか）」

そして悠介はエクステスに魔法を放ちながら飛来していった。

五話目（後書き）

お楽しみいただけでしょうか？

六話目（前書き）

テ、テストが終わりましたので投稿します……。

へ？ではどれくらい？

H A H A H A、さっき言ったじゃないですか

終わりましたのでって。

では、お楽しみ下さい。

六話目

ある大橋に爆音が鳴り響く。

そこでは、八咲悠介とエクステスが戦っていた。

○○○○○○○○

ブリザガ

ファイガ

サンダガ

が、
上位魔法の連発による魔法の嵐がエクステスに向かって放たれる

オールガード

その一つの行動で全て防がれる。

そして、

「トドメだ!!」

グランドクロス

バリバリバリバリ……………

悠介の周りを黒い球体が回り、

ズガン!!!!!!!!!!!!!!

無の力が迸る!

ーシエルー

「ぐつがあ!!」

とつさに防いだが悠介は吹き飛ばされる

しかし、吹き飛ばされながらも

ーサンダガーー

魔法で応戦する!

バゴオオン!!!!!!!!!!

「ぬぐっ!」

エクステスの頭上に発生したが雷の余波でエクステスを吹き飛ば

す！

そして、サンダガを放ち体制を整えた悠介はエクステスの周りを回りながら、

ーホーリーー

追い討ちをかける！

ギョオオオオオ……ズドオオオン！！！！！！！！！！

「ぬぐおー！」

エクステスは吹き飛ばされる。

ドンッ、ズザッ、ザザザザザ……

「ふう、どうだ？効いたか？」

土煙がエクステスを隠す中、悠介は問うように言うが、

「ファッファッファッ、まだまだ」

煙が晴れた先にいたエクステスはかなり余裕な表情をしていた。
(顔は分からないが)

「おいおい、まじかよ……」

「ファッファッファッ、この程度ではやられはせん」

「バグキャラめ……」

この時どこかの赤髪と筋肉達磨はくしゃみをしていた。

「ったく、今はあんまり時間かけたくないんだがなあ」

溜め息を一つ吐き悠介は考える。

「（さてさて、どう攻めようか。下手に攻撃すると痛いカウンタ
ー喰らうしなあ）」

と、そう考え事をしながらエクステスが牽制の為に放ってくる攻
撃を相殺や回避をする悠介もバグキャラなのだろう。

「ちっ、やっぱりジリ貧だな……」

「ファッファッファッ、どうした？こんなものではないだろう。」

「当たり前だコノヤロー」

そして、悠介は構える。

「（しょうがねえ、ダメージ覚悟の近距離戦だ！）」

ー連弾ファイラー

悠介はエクステスに魔法を放ちながら接近する。

ーターンガードー

しかし、エクステスは赤い紋章を出し、防御する。そして、

—アルマゲスト—

エクステスは周囲に無の空間を作り、攻撃する。

バキン！！！！

「ぐっ！！」

しかし悠介はギリギリで回避し、攻撃する。

ー連弾ブリザードー

「ぬぐつ!？」

氷弾がエクステスに命中し、エクステスの足を凍らせる。そして悠介はその隙を逃すはずもなく、

―纏い・ファイガー

右手に猛る炎を纏わせ

「おらあああああ！！！！！！！！！！」

殴り飛ばす！

ズドオン！！

「ぬぐう!!!」

エクスデスは飛ばされる。

「休む隙なんざ与えねえ!」

ーメテオレイナー

「ぐっ!!!」

ーオールガードー

エクスデスは降り注ぐ隕石を防ぐために最強の障壁を展開させる。
しかし、悠介の猛攻は終わらない!

「おおおおお……!!」

ー纏い・ファイジャー

悠介はエクスデスを肉薄にしながら、自分の出せる最高威力の炎の魔法を右手に纏い殴るが、

バリバリバリバリバリ……!

エクスデスのオールガードに阻まれる。しかし

「砕けろおおおおお!!!……!!」

バリバリバリバリバリバリ……!

「ぬぐううううううううううう！」

悠介は、それでもまだオールガードを貫かんと前に進む！

「おおおおお！！！！！！！！！！」

バリバリバリバリバリ……！

そして

バリバリバリバリバリッ……ビキッ！

「なつ！」

「**今だ！**」

悠介は自分の攻撃の威力にオールガードが押し負けてきた事を理解し、

「貫徹ええええええ！！！！！！！！！！」

全身全霊で前進する！

しかし、それはエクステスも同じ事であり、

「させんっ！」

オールガードに魔力をこめ続ける！

そして、

バキッバキバキバキッバリィン！

「何っ！？」

オルガードは砕かれた！

「これで、終わりだあああああ！！！！！！！！！！」

悠介の拳は吸い込まれるようにエクステスの腹部に入り、

ズドオオオオン！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！

ファイガとは比べものにならない程の圧倒的な炎の激流がエクス
デスを焼き尽くす！

「ぐおおおおお！！！！！！！！！！」

ドンッ、ズザザザザザ……

「ふう、焼き加減はミディアムレアってか？」

悠介は勝利を確信したように言い、
焼き尽くされ、黒一面の大地に倒れているエクステスは

「ま……まさか、これ程とは……つづつづつづ……」

そう言っ
て消えて
いった。

○○○○○○○○

「……ふいー、危なかったー。あのまま弾かれてたら死んでたな
ー。」

と、軽く言っているが、実際悠介の体はガードした時に殺しきれ
なかった衝撃等でボロボロになっている。

「あー、これやべーなー。血が足りん。骨も折れてるし……」

「おーい！悠介ー！大丈夫かー！？」

「おおナギか、これが大丈夫に見えるなら病院に行くことをお勧
めする」

と、悠介は戦いが終わったのか近寄ってきたナギに言い、

「あー、やべー、やべーぜこれ、意識保つのもキツイ。」

「いや、全然余裕そうじゃねえか」

と、ナギと一緒に居たラカンも言う。

「いやいや、ホントだってマジでヤバいんだって……」

ド
サ
ッ

「お、おいマジだったのかよ！」

「マジだつて言っただろコノヤロー。あーもーやべ、眠く……な
つて……きた……」

「お、おい！悠介ー！寝るなー！おいラカン！アルかお師匠連れ
てこい！」

「あははー、何か白い服着た人が見えてきたぜー」

「うおおおい！ついていくなよ！フリじゃねえからな！絶対行くなよ！」

「あははー」

「ちよっ、マジでヤバそうだ！ ラカンー早く戻ってこーい！」

こうして、グレートブリッジの死闘は終わった。

「天使さん」

「逝くなあああああ……！！！！！！！！！！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8294t/>

魔法先生ネギま！－最終幻想の魔法使い－

2011年10月9日04時49分発行